

上越市高田で大正13年(1924)に開催された 「雪の展覧会」について

菅原邦生

A Study on Yuki-no-Tenrankai (event of snow) of 1924 in Takada (Joetsu city)

Kunio Sugahara

1. はじめに

雪国の各地では、地域振興を目的に雪のイベントが毎年数多く開催されている。代表的なものには「さっぽろ雪まつり」や「十日町雪まつり」などが知られるが、いずれも昭和25年(1950)に、経済振興や観光振興などを目的に開催され、今日まで継続されている。しかし、それ以前については余り知られていない。各地で開催される雪のイベントの内容も多岐に亘るが、新しい知見を得る上でも、その歴史的な経緯を検討することは重要である。

今回取り上げる上越市高田は、大正13年(1924)に「雪の展覧会」と呼ばれる雪のイベント(写真2)が開催され、国内外の雪に係る様々な展示物を収集して紹介し、大勢の見物客で賑わったことが知られているが、その実態はほとんど明らかにされていない。

本稿では「雪の展覧会」開催の目的や経緯、展示内容などについて、開催後、刊行された『征雪 雪の展覧会記念帳』(上越市立高田図書館所蔵 資料番号J45セ)を基に明らかにする。

尚、本稿における「雪のイベント」とは、克雪や利雪、親雪だけでなく、雪国の暮らしや文化を発信するなど、広く雪に係る内容を含むものとする。

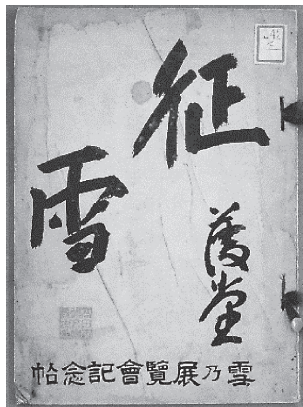
2. 史料について

今回史料として用いる『征雪 雪の展覧会記念帳』(以下『記念帳』写真1)は、展覧会の様子を撮影した写真や開催目的、組織や展示物の内容など多岐に亘って掲載され、「雪の展覧会」の全容を把握できる。

3. 「雪の展覧会」の目的

『記念帳』の「はしがき」によれば、以下の通りである。

第二回全国スキー選手権大会が我が高田市に催されることに決定するや、選手及び来賓並に一般



(写真1)『記念帳』の表紙



(写真2)雪の展覧会入口(『記念帳』所収)

参観者優遇の為と此の機会に雪の高田を紹介する為に生まれたものが、日本に於ける最初のスキー大会協賛会である。日本に於ける最初のスキー大会協賛会は、日本に於ける最初の試みである雪の展覧会を催し、会期四日間に七萬餘の入場者を出だしたと云う素晴らしい好成績を取めた。

とある。全国スキー選手権大会とは、「全日本スキー選手権大会」のことであり、大正12年（1923）に北海道小樽市で第1回が開催され、翌13年に高田市で第2回が開催された¹⁾。開催に当たり設置された全日本スキー選手権大会協賛会の目的は、①スキー選手権大会参加の選手や来賓、一般参観者の優遇と、②雪の高田を紹介するための「雪の展覧会」開催の二つであった。史料には雪の展覧会は「日本に於ける最初の試み」とあり、雪のイベントとしては最初期のものであった可能性がある。また7万人余²⁾もの入場者であったことが知られ、盛況であったことが分かる。入場者が多かったのは、全日本スキー選手権大会に合わせて実施されたためである。

4. 開催期間と会場

『記念帳』「雪の展覧会出品規程」によれば、主催は全日本スキー選手権大会協賛会で、会期は大正13年（1924）2月15日～2月18日の4日間であり、会場は高田市役所³⁾内（写真2）であった。

5. 全日本スキー選手権大会協賛会成立の経緯

「雪の展覧会」を主催した全日本スキー選手権大会協賛会成立の経緯は、『記念帳』「協賛会成立事情」に詳しい。

今協賛会成立の事情を略記せんに、大正十三年一月四日市内青年実業家に依って組織されて居る高揚倶楽部新年宴会の席上、談偶ま(たまたま)スキー選手権大会のことに及び、市民として此の機会に前記二目的を達成すべきであると云うことに衆議一決し、愈々實際運動に着手したのである。(中略) 翌5日同倶楽部の幹部が商工会を訪問し、此の決議をもたらし商工会に以上の目的を達する為にスキー大会協賛会を組織されたい旨を極力慫慂(しゅうよう)したところ、有澤会頭及び大島書記長の共鳴する所となり、此の議は急速に進捗し商工会は同夜常議員会を開催し、種々協議の結果、愈々協賛会を組織することに決定し、協賛会の予算並に実行方法等を同倶楽部に一任するこ

とになった。

とあり、開催約1か月半前の1月4日に市内青年実業家の組織である高揚倶楽部が「雪の展覧会」開催を決定し、翌5日には高田商工会に相談、賛同を得て、同商工会内に全日本スキー選手権大会協賛会が設立され、高揚倶楽部がその予算繰りと実行を一任されることに決まった。

同史料によれば、高揚倶楽部の藤井甚次郎氏は商工会の大島書記長と協力して協賛会会則の原案を作成、1月9日の高田商工会評議員会に諮り、協議の結果、以下の通り決定した。

一、協賛会組織の件

全日本スキー選手権大会に際し商工会主催の協賛会を組織する事、但し総予算は寄付金に依るものなれば経費の大ならざる程度に止むる事（此時は予算約五六百円の申合なり）

二、協賛会則議定の件

第二回全日本スキー選手権大会協賛会々則

主催 高田商工会

第一條 本会は全日本スキー選手権大会協賛会と称す

第二條 本会は全日本スキー選手権大会に協賛し、各種の事業及施設を以て高田市を紹介するを目的とす

第三條 本会は市内有志を以て組織す

(後略)

とある。これで愈々実施の運びとなったが、予算は寄付金であることや、市民有志をもって組織することなど、あくまで民間主体の事業であったことが分かる。

6. 全日本スキー選手権大会協賛会の組織

『記念帳』「協賛会事務概況」によれば、全日本スキー選手権大会協賛会には応接係、芸妓スキー競技係、庶務係、展覧会係の4係が設けられた。

「雪の展覧会」と直接関係の深い展覧会係は、庶務係と7つの部(参考品部、雪と科学部、雪と芸術部、雪と体育部、人形飾物部、雪と生活部、雪と将来部)が設けられた。

この内、7つの部は展示物の収集を目的としており、同史料によれば、各部における具体的な収集方法は、次の通りであった。

参考品部 1. 古来よりの雪及びスキーに関係のある著名な人物又は事件に関し、市内及び全国に亘り参考となるべき物品の募集に努力すること

2. 市内及全国に亘り雪に関する名画の傑作品のみの募集に努力すること

雪と科学部 1. 全部は高田測候所長泉末雄氏に依嘱せり、参考となるべき物品は同氏の下に報告のこと

雪と芸術部 1. 絵画作品工芸品は中等学校図画担任先生に依嘱し、参考品あらば師範学校内牧田先生に報告のこと

2. 写真類は高田日報社神田茂一氏に依嘱、参考品あらば同氏に報告のこと

3. 和歌俳句著書等文学関係作品は高田中学校内小倉先生に依嘱、参考品は同氏に報告のこと

4. 生徒児童の作品は五中等学校図画教諭に依嘱

雪と体育部 1. 内地製、外国製各種スキー募集のこと

- 人形飾物部 1. 市内中等階級婦人冬季外出の形
 2. 同上 屋内の形
 3. 農家男子外出（コイスキを持ちて立てる）の形
 4. 農家小学生通学の形
 以上実地につき詳しく研究の上なるべく巧妙に作製のこと
- 雪と生活部 1. 古来より現代に至るまで市内外及全国に於て使用されたる雪に係る『道具、器具』『防寒具』『防雪具』『履物』『運搬具』等の分類に別ち、全努力を挙げて募集すること
- 雪と将来部 1. 高田市の雪に対し行政的処分を如何にすべきか
 2. 雪の科学的利用に関する新工夫
 3. 雪中交通機器、除雪器具、防雪具等の新工夫
 右三案に対し中等学校生徒の考案及び一般市民有識者の考案の寄書或は設計、図案の寄稿を乞い陳列すること

以上、雪・スキー関係の著名な人物や事件に係る品物、雪の名画、さらに雪に係る、科学、絵画、写真、和歌、俳句、著書、生徒児童の作品、国内外のスキー、冬季の服装、防寒具、防雪具、運搬具など様々な物を収集しようとする意図が伺える。特に専門的な分野となる「雪と科学部」は高田測候所長泉末男氏、「雪と芸術部」は地元中等学校教諭や高田日報社の神田茂一氏など関係者に依嘱した。

また雪と将来部では「雪の科学的利用」など今日的な課題も含まれ、中等学校の生徒や一般市民からの寄稿を求めるなど画期的な企画内容を含むものであった。

7. 「雪の展覧会」の資料募集と展示物の内容

7.1. 資料募集の経緯

『記念帳』「雪の展覧会（一）資料募集状況」によれば、大正13年（1924）1月21日に協賛会役員（藤井甚次郎氏）を東京に派遣し、帝国大学地理教室山崎直方博士や慶応大学体育部山岳会、東京朝日新聞社、報知新聞社、運動具店美津濃株式会社など多くの個人や会社などを訪問して資料を収集するとともに、展覧会資料募集係員も市内外や遠隔地を回って資料収集に務めた。

また降雪地の駅長100名、また中頸城・西頸城・東頸城郡の各小学校長宛に出品依頼を兼ねて、参観勧誘状を200通送ったが、資料収集状況は芳しくなかった。雪と直接関係のない上杉謙信公遺品の展示もこの頃に決定したものである。展示物の少なさからであろう。

また同時に東京市、飯山町、小千谷町、新井町、荒牧村、春日村に募集係員を特派し、資料収集に努めた。さらに2月3日には懸賞論文を募集することに決し、募集テーマは以下の通りであった。

- ①高田市の雪に対し行政的処分を如何にすべきか
- ②雪の経済的価値増進法如何
- ③雪中交通運輸機関、器具、防雪、除雪、防寒具の新考案如何

以上につき、22点の応募作が集まった。その内容がどのようなものであったかについては不明であるが、前述「雪と将来部」の資料収集方針とも重なり、克雪や利雪に係るテーマが当時から関心が高かったことが分かる。

以上の努力により、7.2にみる展示物が集まった。

7.2. 展示物の内容

では実際の展示内容はどのようなものであつたらうか。『記念帳』「展覧会展示」によりみてゆく。展示は会場となった高田市役所だけでなく、会場以外にも設置された。

7.2.1 会場内

会場内は市役所の各室ごとにテーマをもって展示された。『記念帳』に記された展示内容を表1に示す。また写真3は生活道具などの展示の様子である。



(写真3)生活道具の展示(『記念帳』より)

展示室は計9室であり、第1室は雪と動植物、第2室は雪と科学、生活、運輸、第3室は雪と写真、第4室は雪と芸術、及参考品、第5室は雪と文学部、第6室は雪と芸術部、第7室は謙信公遺物、第8室は小学校児童の作品、第9室は雪と体育部であり、展示内容は多岐に亘る。

次に室ごとに展示内容を検討する。ここでは必ずしも民俗学的に考察するものではないが、展示品の中には用途不明なものも多く、各種辞典類⁴⁾などを参考に、その把握に努めた。尚、カタカナ表記の中には現在と呼び方が異なるものもある。

第1室では雪中の松林の模型の中に動物(白鳥、かけす、山鳥、雷鳥、猪、りす、穴熊など)を配し、見学者が臨場感をもって見られるように工夫されていた。記載の動物はいずれも、高田に限って見られる訳ではなく、雪中林における諸動物のあり様を紹介するために特に工夫されたものと考えられる。また農学校(現在の新潟県立高田農業高等学校)から出品された異齡林や顔雪(たいせつ)防止林などは雪崩防止策として紹介されたものである。

第2室では、記録にみるように雪に関する科学的な統計や雪中用具が数多く展示された。統計の詳細は不明であるが、雪中用具については主に以下の4つに分類される。

①除雪具関係

コイスキ、雪掻き、シャベル、大鋸などが展示された。この内、「コイスキ」は「コスキ」とも呼ばれ、除雪に用いる板状の道具(ぶな等で作られる)で、「大鋸」は「雪鋸」とも呼ばれ、排雪時に堆雪を切る道具として使われた。

②防寒具関係

シュロ帽子、風合羽、覆面帽子、真綿シャツ、股引、綿帽子、ツグラ、馬の耳隠しなどが展示された。この内「シュロ帽子」は棕櫚で編まれた水はけのよい精巧な被り物で、関西地方で作られた移入品であった。「風合羽」は木綿製の袖のない合羽で、「綿帽子」は、女性がハレの日に被る被り物で真綿を使う例が多かった。防寒としても用いられたのであろう。「ツグラ」は幼い子供を這い

(表1) 「雪の展覧会」における展示物一覧

展示場所	テーマ	展示内容(原文より)	展示方法・場所(原文より)	備考
第1室	雪と動植物	白鳥、かけす、山鳥、雷鳥、猪、兎、りす、穴熊、てん、いたち 農学校出品の異齡林、類雪防止林、其他有益なる絵図数葉 植物	雪中の松林中に配置す 右側壁面 机上	
第2室	雪と科学、生活、運輸	雪に関する科学的統計類は勉めて面白く衆人の眼に入るよう雪だるまの画、或は人物の大小により表現され、四尺に三十尺大のもの二枚、雪の説明同上大のもの一枚、掛図十本(雪の形、最近十ヶ年間の降雪量、赤雪、雪女郎、雪と農作物の関係、スケージングと氷の重さ、全国初雪期調査、高田駅付近 駅の除雪費と除雪人夫、各年比較図其他) 雪と生活部にはコイスキ、雪掻き、シャベル、大鋸、シュロ帽子、風合羽、覆面帽子、真綿シャツ、股引、綿帽子、ツグラ、馬の耳隠し、雪脊追籠、雪もっこ、金かんじき、竹かんじき、枝かんじき、藁くつ、わらじ、あくど掛け、ばんどり、深くつ、前當、藁手袋、踏俵、すかり、三平、すべ、しどろ、ねご靴、ねご草履、いたち靴、いたち草履、庄内帽子、加賀みの、胴みの、雪中軍馬かんじき等各品数種に亘り品質形状の異なるものは総て募集し、使用不明のものには實際使用の図画を附した。室内中央 雪と運輸の部には一本樫、荷樫、樺太の犬樫、雪草履、露助カンジキ、小供用樫、人力樫等		室内が手狭のためこの部に属すべき大樫(長さが二間余)、樺屋組製の犬樫(樫腹の中が一尺余)、一本樫使用の形、亀樫等は別室に置いた。
第3室	雪と写真	トウヴァゴン競技、スノーシューを穿てる婦人、其他パウルス氏出品の外国写真絵ハガキ等最も注目に値す、東京朝日新聞社の上の岳雪中路攀の壯擧の写真は四十数葉に亘り當時の状を役佛たらしめ、偕行社のスキー写真、農学校出品の雪の勝利、人の勝利の二面の額に入れたる各種の写真、田中氏のアルプスの実況絵ハガキ、大島氏の小樽の雪中風俗、玉井氏の雪景、博物館の雪と体育に関するもの拾数葉、室内写真を以て蔽はれ応接に違あらず、特に飯山より取寄せたる雪より造れる氷水物を陳列し写真(製造機)を附して観覧に供し、織物の富士山岳等もあり		
第4室	雪と芸術、及参考品	各中学校生徒の傑作品数十点 商工学校の漆工科の工芸品(吹雪塗)も数点あり レルヒ中佐愛用のスキー、中佐直筆の額面三面、写真軍服姿、和装の姿、堀内大佐、鶴見大尉を従い金谷山に登る所、高田別院横の所、旅館山口屋の庭に立てる所、スキーにて立射、勝射、伏射の各写真、スキーにて露営舎を作りし所、其他得難き貴重資料あり、又故酒井薫氏遺品皮靴、スキー杖、雑囊、細引等、パウルス氏出品の子守ぞり、ホッキーステッキ(バック共)、マガジン壺足、スケート靴共、小供コイスキ、スノーシュー、トウヴァゴン等あり、其他桐蔭会出品のヒマラヤ山探探検の際の天幕一具、佐藤四作氏のエスキモーの毛皮靴、芳澤公使寄贈の毛皮帽子、風帽子、毛皮靴下、羊毛靴下、防寒靴其他	壁面 中央机上	
第5室	雪と文学部	古来よりの雪に因めに和歌、俳句、詩等の傑作品のみを集め、小倉右馬氏より揮毫を請い出陳す 懸賞募集に応募されたる答案	中央机上	
第6室	雪と芸術部	春光会出品の傑作品、雪景、スキージャンプ等其数三十点 越路人形(雪国の郊外に子児の遊ぶ所)の飾り物、大隈侯爵家のペンギン鳥、福島男爵家の故安正大将の西伯利横断当時の遺愛品(毛皮外套、同上衣、外套、毛皮長靴、羊毛製長靴、皮ズボン、毛皮帽子、軍帽、メリヤス手袋、手袋軍服)等あり	壁面 机上	
第7室	謙信公遺物	第一義の大額、川中島戦の太刀、食器、守護観音、軍陣旗、木像、春日山城図、絵像、采配、祈願文等あり	笹川林泉寺住職の説明付きにて展覧に供す	
第8室	小学校児童の作品	150点余	廻廊下一面に陳列	
第9室	雪と体育部	東京美津濃運動具店よりスキー帽子、エッグボックス、カップ、ヒーロー食器、ロックネールビンディングサンプル、雑囊、リュックサック、炊事器大小、登山眼鏡、便利器、アックス、フィッフル、ナイフ、登山靴二種、ハンス、レーザーント、六十米クライミンググローブ、二十米同上、リュックサックサンペー、スキー帽三種、ピッケルリングククアンフェルト、雪落、カブト鉢、シールスキン、スキー(ジャンプ用共)6台、其他偕行社より朝鮮土人のスキー二種、ロシアのスキー、大スキー、山口式藁靴スキー、其他市内月岡、大原、山善、小林、報国商会、高田物産、三間の各店独得のスキー各種、其数実に百台に近く、壁面には雪中体育として兎狩、雪投げ、雪陣の状を画ける絵を掲ぐ、他の一方には小池幸司郎氏苦心の傑作たる雪国風俗の飾り人形あり、農家の除雪に外出せる所、米俵をそりに積んで引ける所、小供のスキーに乗れる所、婦人の箱そりに乗って外出先より帰宅せる所を現はす、背景は牧田、佐野、岩崎、山岡、岡崎の諸氏合作に成るものであった。	一部壁面	

出すまで入れておく籠である。

③冬支度関係

雪脊追籠、雪もっこ、金かんじき、竹かんじき、枝かんじき、藁くつ、わらじ、あくど掛け、ばんどり、深くつ、前當、藁手袋、踏俵、すかり、三平、すべ、しどろ、ねご靴、ねご草履、いたち靴、いたち草履、庄内帽子、加賀みの、胴みのなどが展示された。この内「雪もっこ」は雪捨てに用いる雪中運搬具で、「金かんじき」は、氷った雪道などを歩く時に滑らないように履物につける爪のついた鉄製の滑り止めである。「竹かんじき」「枝かんじき」は雪中や凍った雪道などにおいて、藁沓などの下に付けて履く、竹や木枝を輪やすだれ編みにした履物である。「ばんどり」は背中当てで、「深くつ」は雪中に履く藁製の長靴である。「あくど掛け」は雪中歩行や労働の際に踵（かかと）を寒さから守るために巻く布や稲藁製の踵掛である。「踏俵」は稲藁やガマを円筒形の俵に編み、内底に藁沓や下駄、草履などをとりつけた雪踏み用の履物である。「すかり」は脚半ばに届く大雪の際に使われる特大のかんじきである。「すべ」は、その発音から「スッペ」と思われ雪中用の藁製の短沓である。「加賀みの」は加賀国で作られる上等な蓑で、細い草を用いて作り、肩から背の部分に萌黄糸で編んだ網をかけたものである。「胴みの」は上半身を覆う一般的な蓑である。尚、「雪脊追籠」、「三平」、「しどろ」、また「ねご」や「いたち」の名を冠した靴や草履などは不明で、今後とも検討が必要である。

④運搬具関係

一本櫓、荷櫓、樺太の犬櫓、雪草履、子供用櫓などが展示された。

第3室では、トウヴァゴン競技（競技内容は不明）、スノーシュ（西洋式のかんじき）を履く婦人の写真やパウルス氏出品の外国の写真や絵葉書、偕行社のスキー写真やアルプスの絵葉書、小樽の雪中の風俗などが展示された。偕行社とは明治43年（1910）5月に落成した陸軍師団将校の集会所であり、スキーに関する参考品を陳列するために大正元年（1912）12月に2階建ての新館が建設されている⁵⁾。またパウルス氏とはカナダ人宣教師で、大正5年（1916）に来日し、翌6年（1917）から高田聖公会にてキリスト教の伝道活動を行った人物である⁶⁾。

第4室では、中学校や商工学校(漆工科)の生徒作品や、レルヒ中佐愛用のスキーや中佐直筆の額面、中佐の写真（軍服姿、和装の姿、堀内大佐・鶴見大尉を従い金谷山に登る所等）、その他個人所有の品物を中心に展示された。レルヒ中佐とは、スキーを日本に伝えたオーストリア軍人で、高田駐屯の第十三師団五十八連隊において、日本初の本格的なスキー講習を行った人物である⁷⁾。また堀内文次郎大佐や鶴見宜信大尉は、高田駐屯の各部隊から選ばれたスキー研究委員のメンバーである⁸⁾。ホッキーステッキとは、その発音から現在のホッケースティックの可能性がある。マガジン一足は不明で今後とも検討が必要である。

第5室では、雪に関する和歌や俳句などの作品や懸賞論文が展示された。

第6室では、春光会の出品作品や、スキージャンプなどの紹介、越路人形（雪国の郊外に子供が遊ぶ所）の飾り物、ペンギン鳥の紹介、福島安正陸軍大将のシベリア横断時の遺愛品などが展示された。

第7室では、第一義の大額、川中島の太刀などの謙信公の遺品が林泉寺住職の説明とともに展示された。林泉寺とは上杉謙信公が幼少期を過ごした春日山山麓の禅寺である。

第8室では、小学校児童の作品150点余が展示された。

第9室では、登山用具やスキー用具各種、雪国風俗の人形などを中心に展示された。東京三津濃運動具店は現在の大手スポーツ用品店である(株)ミズノの前身である。ヒーロー食器は恐らくホーロー食器と思われる。アッキスは手斧で、シールスキンはスキーをはいて登高する際に、スキーの滑走面につけて

滑り止めとして用いるアザラシの皮である。六十米クライミングroppは、クライミング用のロープのことと思われる。山口式藁沓スキーは、第十三師団参謀でスキー研究委員でもあった山口十八大尉が高価なオーストリア式に代わるものとして藁沓とカンジキ用の細竹を用いて作らせたものである⁹⁾。

一方、ロックネールビンディングサンプル、フィッフル、ハンス、レーザーント、リュックサックサンペー、ピッケルリングククアンフェルト、カブト鉾などは不明で、発音が異なる可能性もある。

また全体的な展示方法としては壁に資料を掲げ、また机上に配し、室内全体に遍く展示していたことが分かる。また展示物として、陸軍と関係したものも多く、高田が師団駐屯地であったためである。

7.2.2 会場外

会場外については、まず高田駅構内においてラッセル式排雪車（車両の前方に排雪板を設けたもの）とその運転状況、さらに市内各町においては、雪の門柱、雪だるま、雪のトンネルなどがあり、また会場前には、高田十三師団出品の兵器と雪中自動車(菅原村佐々木啓蔵氏出品)が展示された。

以上、概ね収集目的にかなう展示物が数多く集められた。特に雪に関する民具や登山用具、スキー用具などは種類が多かった。

8. おわりに

大正13年（1924）に第2回全日本スキー選手権大会に合わせて高田で開催された「雪の展覧会」は、雪のイベントの最初期のものと考えられ、雪に関する様々な展示物が市内外から集められ紹介された。その内容は植生、動物、科学、生活、芸術、体育など多岐に亘り注目に値する。尚、展示内容については用途不明な物もあり、今後とも検討が必要である。また実施主体は高田商工会内に設置された全日本スキー選手権大会協賛会であり、市役所で開催されるなど官民一体の協力関係が認められる。開催決定から開催日まで約1か月半であり、準備期間の短さは驚異的である。ただ展示数を確保する意味から、本来、雪と直接関係のないものまで一部展示されたのは残念であった。

近年、各地で実施される雪のイベントは、広く市民を対象としたものが多いが、初めから特定のテーマに沿って深く掘り下げ、内容の広がりには欠ける嫌いがある。歴史的にも文化的にも様々な角度から雪国を見つめ直し、雪国本来の姿を広く市民に啓蒙する姿勢が、今後、多くの人々の共感を得ることに繋がるのではないだろうか。

注

- 1) 高田市史編集委員会編：高田市史 第二巻、高田市役所、1958 p.279
- 2) 注1) 前掲p.683によれば、直近の大正14年(1925)の高田市の人口は30,897人であり、人口を遥かに超える人々が見学に訪れたことになる。
- 3) 現在の本町3丁目に位置し、上越市発足後、昭和51年(1976)に新庁舎移転にともない取り壊された。
- 4) 民具については、①日本民具学会編『日本民具辞典』(ぎょうせい、1997)、②十日町市博物館編『雪国十日町の暮らしと民具 重要有形民俗文化財 十日町の積雪期用具 図録』(十日町市博物館、1992)、③『雪国の民具 -旧積雪科学館収蔵民具目録-』(長岡市立科学博物館、1971)、④「十日町の積雪期用具」一覧表(新潟県十日町市、1990)、⑤大橋勝男・岡和男『新潟県雪ことば辞典』(おうふう 2007)、⑥福田アジオ他5名編:日本民俗大辞典 上・下、吉川弘文館、1999-2000他を頼りに、その把握に努めた。また登山道具については、⑦堀田弘司『山への挑戦 -登山用具は語る-』(岩波新書、1990)などが参考となり、スキー用具については、日本スキー発祥記念館(新潟県上越市)の展示が参考となった。
- 5) 高田市史編集委員会編：高田市史 第一巻、高田市役所、1958 p. 819
- 6) 村山和夫監修：くびき野文化辞典、社会評論社、2010、p. 236
- 7) 上越市史編さん委員会編：上越市史 通史編5 近代、上越市、2004、pp. 321-323
- 8) 中浦皓至著、池墻忠和編：レルヒの指導から100年 日本スキー・ほんとうの源流、レルヒの会、2010、p. 18
- 9) 長岡忠一：日本スキー事始め、ベースボール・マガジン社、1989、p. 81